

幼稚園におけるリーディング・レディネス

—文字の指導はいかに
考えたらよいか—

黒田成子

従来世の多くの親達は子供が六才になって小学校に入り、その日から文字を習うと考えていた。別に子供の個々の身体的、知的、情緒的、社会的発達などは考慮しなくとも、とにかく六才になれば既に文字を習得する機能は充分そなわっているかの如くに考えられていた。近年に至って欧米の教育者達が子供の精神年齢が六年六ヶ月に到達して始めて文字を習得出来る用意があると見做される様になり、我が国に於ても文部省でこの事を明かにするようになった。

ゲゼル等によれば子供は幼少の頃から既に文字に対して関心があり、十五ヶ月の嬰兒が大人のひざののって絵本を見る事などは嬰兒期の子供に見られる現象になっている。六才の子供が文字に対してどれだけの用意があるかという事はその子供が生後より六才に至るま

での身心の発達及びあらゆる経験に基礎をおくものである。これを無視していたずらに詰込み教育をするならば読方に対する興味を失うばかりでなく、子供のパーソナリティに好ましくない影響を及ぼす所が大である。今日心ある教師達は小学校で読方を教えるにもこの点に考慮を払い、又幼稚園に於ては文字は教えないが、就学前の経験を豊富にする事に意を用いている。

最近幼稚園関係者の中で科学的な態度をもってテストを施行する事が盛になって来た事は喜ばしい。又言語指導の研究と並行してリーディング・レディネスの問題が取上げられる様になった事は当然な事とはいえ、今後の幼稚園及び小学校教育に非常に資する所があると思ふ。併し、とかくテストのためのテストといった徒らに偏重している考えも時には見られるので、ここに正しい意味のリーディング・レディネスは何かという問題について考えて見たい。

リーディング・レディネスの意義

レディネスは一般に用意性とか準備している状態等と訳されている。ある学習を習得する為にはそれに必要な知識、経験、技術、精神的、身体的機能等の条件がそなわっていないなければならない。この準備されている状態がレディネスである。読方に関したレディネス即ちリーディング・レディネスには身体的、知的発達及びこれをコントロールする力、及びよみ方に対する興味や技能を必要とする。

リーディング・レディネス・テストは子供がどの程度読み方に関して必要な能力をそなえているかどうかを調べる為につくられたも

のであるが、それが果して子供の将来の読方に関する能力をどれくらい予測出来るかという事はかなり問題とされている。

エフ・ロビンソンや、ティール・ホルの研究によるとレディネステストは信頼度が非常に高いが、将来の読書力を予測する点では知能テストの程度を出てないといつて居る。(註二) ビー・キースタによればレディネス・テストも知能テストも共に六才以下の子供には予測の確実度が少いといつている。(註三) これに反してアール・メルヴィルはレディネス・テストの方を支持している。(註三)

アメリカのレディネス・テスト

米国で一般に支持されている説はレディネス・テストは知能テストと殆ど同じものを測るが、レディネス・テストの方が子供の読方に関する特性や能力を一層明瞭に示すという事である。(註四) この他幼稚園から小学校に進学するに当ってレディネス・テストや種々のテストを施し乍ら子供が教師の指示に従う事が出来るか、又注意力がどれくらい持続するかどうか等を見るのである。そればかりでなく、教師はレディネス・テストを子供に施す事により、しばしば情緒的、社会的問題に対する洞察の端緒を得る場合がある。

近来アメリカに於て学校の教師達が子供達の特徴を診断し、その必要性を探し出す事が非常に上手になって来たと言われているが、一般に次の様な方法が取られている。先ず何よりも児童発達を基盤としたたゆまない研究が必要である。その上に子供の観察、殊に逸話的材料の蒐集、学校側の記録(累積したもの)の研究、それに諸

種のテストの施行、評価等による。一般にレディネス、テスト程度のもものは教師がこれを行い、知能テストになると専門家に依頼するのが普通とされている。

レディネス・テストの使用法と注意

レディネス・テストのつかい方も種々あるが、学期のはじめとか終りに施して比較したり、グループを分ける時や進学に当つての参考にしたりの事であるが最も大切な事は云う迄もなく子供自身の欠陥を見出し、これを補う事に意を用いる事である。

テストを行った教師がそれで万事が終つたと思つたり、数字的な結果を父兄に知らせたりする事は甚だ遺憾である。ひどい例では、東京の或る幼稚園でテストを行い、園児の知能指数を母の席上で発表した為母親達は戦々兢兢として非常に不安な思いを経験させられたさうである。テストの結果は専ら教育指導の参考の為に使って、必要のある場合は個人面接をして総合的な報告程度にとどめた。懇談をするに当つては知能指数を知らせる様な事は慎しみ、その子供の能力が組の中で大体どの辺の所に居る位の事を話し合ひ、むしろ教師も父兄も共に子供の全体的な発達に考えを及ぼす様にしたいものである。幼稚園で行つたテストの記録を小学校に提出出来れば累積記録の一部となり貴重な研究資料となる。

レディネス・テストも他のテストと同じように絶えず批判的に最大の注意をもって利用したい。テストの結果を絶対視するあまり、未だ他の子供達と同じレベルに到達していない子供達に不当な

批判を加える事にならないとも限らない点を注意しなければなら
ない。

レディネス・プログラムに就て

レディネス・プログラムなどと大げさな事を云うと或る幼稚園で
はレディネス・テストを施行する事に重点をおいたり、ワーク・プ
ック式のをさせたりする事を考えるかもしれないが、正しい意
味のレディネス・プログラムというのはこうした偏った保育ではな
い。読方を習うためには知的、言語的能力が発達していなければな
らないばかりではなく、視覚、聴覚、運動神経等身体的にも発達し
ている事が必要である。であるから、レディネス・プログラムとい
うのは幼稚園のカリキュラム全般に織込まれ、子供達が生きた経験
として生活出来るものでなければならぬ。

視覚の判別力を助ける

大部分の五才児の視力は小さい文字に長く焦点を合わせる事が出
来ない。ベッツの調べた所によると健康な六才児の八十パーセント
は遠視であつて一寸長く文字を見ていると疲れてしまう。又エル・
デーヴィスの研究によると四十一人の小学校一年生に対して入学当
初に眼のテストを行った所、本を読む程度の距離で事物に焦点を合
わす事の出来る者は僅か全体の十五パーセントに過ぎなかったのに
比べ、四十五インチ程に距離を離れた所、六十三パーセントも焦点を
合わせる事が出来た。(註五)

幼稚園ではこの様に五、六才の子供達に近い距離でものを見る事

に慣れさせなければならぬわけである。視覚を伸ばす為の遊びと
してはいろいろあるが、類似点の多い動物や花の絵を比較させて、
類似点、相違点を述べさせる事も出来る。大きさの異つた、円形、
四角形、三角形等を書いてこれを切つて使う事等は物の大小に対し
て注意力を養う事となる。絵を描く事、ものを切る事、フィンガー・
ペインティングや、パズルのはめ込みをする事等も、視覚を伸ばす
のに非常によい。

四才を過ぎる頃になると子供は自分のおかれた環境に対して興味
を持つようになる。次第にものの空間的な関係を知るようになる
と、上、下、前、後、等という言葉に気付くようになる。子供達が
絵について説明する時「どこに……」という事をハッキリ云うよう
にさせる。こういう時期に物を隠しておいて在り場所をあてるゲー
ム等取り上げる。自由画などもさかんに奨めたい。こういうものを
見て空間的概念が養われつつあるかどうかという事を見る事が出来
るのである。

聴覚の判別力を養う

ピアノをつかつて大、小、強、弱、の音を識別させる。又鐘やチ
ヤム、たいこ、カステネット、笛、等の音色の違う事を知らせ
る。「三匹の熊」「浦島太郎」等の劇あそびをしながら声の調子の
相違という事に気付く。歌をうたう時の声に注意を払ひ度い。そし
てよく聞かれる様なレコード歌手等の不自然な歌い方ではなく、い
つともごく自然な無理のないやさしい声で歌をたのしむようにした

「かごめ」や「ずいずいずっころばし」や土地の民謡をロザさんで遊ぶ事をもつとするとよい。時には短い歌を大きい文字で黒板に書く。こういう事をしながら子供達は音声と文字と何らかの關係がある事を知るようになる。よく子供は「高田先生だから、たかたかたかいよ。」等と意味もない事を云ってふざけるが、彼らは音声と文字に興味を示してこれらをもてあそんでいるのである。お弁当のあともしりとり遊びや電信遊びなどは保母の心がけ一つで立派なリーディング・レディネスのプログラムになっている。

言語発達を助けて

次に言語発達、殊に語彙を豊富にするためのプログラムを考えたい。子供が幼稚園に入園した時は言語的素養もごく限定されているが、在園中に話し言葉を増進させ、思っている事を表現出来る能力を養われるような経験活動を与えなければならぬ。

幼稚園における「お話」は、こういう意味で非常に大切なものがあり、あらためてここに紹介する必要もないが、子供達は話しを聞くばかりでなく、自分達の言葉で話しをしないおすと、創り出すとかいう事もさせたい。こうして思っている事を継続的につなぐ事が出来る様になり、やがては簡単な話しの原因、結果という事も推察出来るようになる。発表力もおのずから養われる。

毎日の話し合い、おままごとやゲームや劇遊び等をしなから、或は共同の手紙を書くとか、紙芝居や人形芝居を創作したりそれに

演したりする事によって、発表力、表現力を養う機会は無為にある。

意味のある豊富な語彙を養うために自由遊びや束縛されない環境がどんなに大切であるかという事は多くの学者達の研究をまつ迄もない事である。動物園や消防署、魚屋さんや八百屋さんへの一回の見学がどんなに生きた概念と豊富な語彙を子供達に与える事か、現場に働く者達はいつもそれを経験し乍ら、その効果の大きいのに眼をみはる思いである。であるからフィンガ・ベインティング一つ造るにしても高価な商品で注文するのでなく、面倒がらずに子供達と共に近所の店へ買物に出かけ、メリケン粉を煮て粉石鹼をまぜてボスタ・カラーで着色する事までさせたいのである。

幼稚園の中で先生は随所に文字をつかう事が出来る。例えば黒板に当番の名前をかく。天気グラフをつくる。壁の絵に題目を大きいひらがなで書く。部屋の隅によくとりかえらるる絵本のライブラリーを造る。これらも皆子供達と共にしたい事である。

彼らにこうしたナマの経験を与える他に、スライド、フィルム、展示、ラジオ、等も活用したい。

結 び

以上幼稚園に於けるレディネスの極く一般的な問題を取り上げ、これを助長するプログラムについて考えて見たが、教師たる者が単にレディネス・テストやレディネスを助けるプログラムに熱中する事が重要ではなく、子供の全人的教育と発達に意を用いる事が究極の目的である事を忘れてはならない。

近頃個人差という事がやかましく云われているが、此の極くユニークな個人というものをよく知る為には先ずその同年齢の子供達について知って置かねばならない。云いかえればそこに規準（ほんま）というものゝの意義が出て来るわけである。ゲゼルはくりかえしくりかえしこのノルムについての考え方を戒めている。レディネス、テストを施して一人の子供を検査しても、それは検査や他の子供との比較と云うような事で仕事が終わって意味がない。彼はほんとうの仕事と云うのはその子供丈の持つ獨特の規準と云うものを採り出して指導する事であると云っている。(註六)

であるから就学前の子供達に教師は読方のレディネスを与えようとして子供の過去の発達を理解し、又次の段階に至る為のレディネスが生じるように環境設定を考えてやる必要がある。そしてたえず子供の情緒的、知的、身体的発達に眼をそそいで置かねばならぬ。

こう考えて来ると読方のレディネスという事は幼稚園及び小学校低学年の問題として考ふるわけにはいかず、リーディング・レディネスの問題は高学年迄引続くものであるという事に思ひ至る。我々のゴールは子供が成熟発達して行くと共にそれにともなう前に押し進めて行かなければならない。他の教科もそうである様に「読方の進歩は子供の一部の知的発達ではなく、あくまでも彼の全人的発達に関係している事を銘記し度いと思ふ。

註一 Hirdreth, G. Readiness for School Beginners World

Book Co. N. Y. 1950

註二 Keister, B. Elementary School Journal, 41, 1941

註三 Melville, A. Measurement Education N. Y. 1953

註四 Hirdreth, G. Readiness for Reading, The Forty

Yearbook, Univ. of Chicago Press, 1949

註五 Davis, L. Supplementary Education Monographs No. 49

Univ. of Chicago Press, 1939

註六 Kavin, E. Observations, Tests, and Measurements,

The Forty Sixth Yearbook, Univ. of

Chicago Press, 1947

(東洋英和附属幼稚園)